

---

# ストループ現象

陽月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ストループ現象

### 【Nコード】

N3234P

### 【作者名】

陽月

### 【あらすじ】

最近蘭の様子がおかしい。

そう感じた和葉は、平次と共に東京へ足を運ぶのだが……。

それこそが全ての始まりだった。予想できるはずのない、奇想天外な事件の……。

カップリングは平和新蘭ですが、コンビや友情的な意味で他のキャラとの絡みが多いです。シリアスな場面もありますが、基本コメディ重視です。

この作品は、名探偵コナンノベルズの前身、CNR時代に書いた  
ストリップ現象のリメイク版です。

## 0 プロローグ

あたしは遠山和葉。合気道二段の普通の女子高生や。

幼馴染の平次は西の高校生探偵。

危なっかしい事件ばかり首つつこんで…

不安やない言うたら嘘になるんやけど、でもあたしも、事件解いと  
るときに平次が……

べつ、別に好きとかそういうんやないんよ！！あつ、あたしは平次  
のお姉さん役として平次が活躍するのが嬉しいだけなんやからな！  
！！

探偵言うたら、蘭ちゃんの幼馴染の工藤君も探偵なんや。

西の服部、東の工藤言われとる程なんやけど、最近工藤君、見かけ  
へんのよね。

幼馴染の蘭ちゃんも知らへんみたいで……寂しそうな顔しとったし、  
工藤君の話も時々出とったんよ。

最近までは。

なんや最近変なんよね、蘭ちゃん。

工藤君の話の代わりに、居候の男の子、コナン君の話をようするよ  
うになってん。

あたしはてつきり工藤君が帰ってきたと思ったんよ。でも平次に聞  
いたんやけど……

「なあ平次、工藤君最近帰ってきたん？」

「んなアホなことあるわけないやろ。あの坊主がおるんやし」

「坊主？コナン君が何か関係あるん？」

「いや、あの、それはあれや、あの坊主が姉ちゃん守っとるんやから、工藤の近づく隙があるわけないやろ、ゆうことや」

「……………何や変なの」

「誰が変や！！そないなこと聞くおまえの方がよっぽど変やろ、ドアホー！！」

「っ……………！！誰がドアホや、ドアホーっ！！！！」

……………みたいな調子で、平次とは話にもならなかった。

だからあたしは決めたんや。

あたしの言葉で、直接蘭ちゃんに聞こうって。

「蘭ちゃん、急にごめんなんやけど、今度の春休み東京行ってもええ？

久しぶりに蘭ちゃんに会いたいんやけど……」

こうして、春休み東京に行くことにしたんや。

でも……………これが全ての始まりやったんや。

予想できへん、奇想天外な出来事の……………

## 0・プロローグ（後書き）

覚えている方がいらっしやったら是非握手したいところです。こちらでは初投稿となります。

以前（といっても5年前くらい）小説家になろうの前のCNRで投稿していた明子改め陽月といます。

この小説は、その時代に書いていたものなのですが、話が煮詰まっ  
て当分放置していたものです。見てくださっていた方には申し訳な  
い……

今見ると、色々と拙い表現や、ツツコミどころ満載で……いや、今で  
も十分ツツコミどころ満載だと思います。

流れはだいたい同じ、ですが表現やそこに至るまでの経緯は大幅に  
変え、一から書き直しました。なので、以前の小説を知っていらっ  
しやる方は、このあとどうなるのかも分かると思います（滝汗）  
まあそこなく楽しんでいただければ、と思います。

## 1．すべてのはじまり

三月後期。

卒業式も終わり、新たな生活に胸躍らせる春の時期。

在校生たちは、春休みを迎えていた。それは、西の名探偵と名を馳せる彼とて例外ではない。

「なあ和葉。ホンマにくど…あの坊主のところへ行くんか？」

「当たり前やん。もう蘭ちゃんと約束したんよ？」

西の名探偵こと服部平次は、その幼馴染、遠山和葉の春休みの計画に難色の顔を示していた。

そんな平次の様子を見て、違和感を感じる和葉。

「どないしたん？いつもやったらあたしが言わへんでも平次から行くゆつのに……コナン君と喧嘩でもしたん？」

「そういうわけやないんやけどなあ……」

「そういうわけやなかったらどこういうわけなんよ？なんやコナン君に後ろめたいこともあるん？」

図星をつかれた、といった表情を一瞬浮かべ固まるも、すぐに和葉の言葉に反論する。

「そつ、そんなわけないやろ？えつ、ええやろ、あの坊主に会いに行ったるわ！！」

「……なんや変なの」

平次の不自然な様子に、猜疑的な目を向ける。

だが、平次の漫才レーダーは、変という言葉に反応したらしく、不随意的にツツコミを加える。

「誰が変や！オレが変やったら」

「おまえの方が変や、ドアホ。やろ？このドアホ」

笑顔でそう言い放つと、和葉はスタスタと先に行ってしまった。そんな和葉を見ながら、誰に聞こえないような声で呟いた。

「……何も事情知らへんで」

そして迎えた東京行き。

二人は、例の如く、毛利探偵事務所でお世話になることにした。



「いらつしゃい、和葉ちゃん、服部君」  
「ようこそ、和葉姉ちゃん」

毛利探偵事務所のチャイムを鳴らすと、蘭とコナンの二人が玄関で出迎えた。

コナンが平次の名を呼ばなかったのは、当然のことながらわざとである。

一抹の寂しさとツツコミレーザーが化学反応を起こし、爆発しそうになった平次だったが和葉の無視という名のスルースキルで、見事な消火活動が行われた。

「蘭ちゃん、それにコナン君元気やった？」

「うん、元気にしてるよ。コナン君もね」

そういうと、チラッとコナンの方を見つめ、意味ありげな視線を送る。

そんな視線に気づかず、更に言葉を紡ごうとする和葉。だが、先程の復讐と言わんばかりに、平次が挨拶と言う名の悪態をついた。

「姉ちゃん久しぶりやな。この坊主がなんや変なことやってへんか？」  
「？」

「平次いゝ？小さい子供の前で何ゆうとるん？」

遮られた恨みと相まって、笑顔で睨みつける。

ストレートなツツコミ攻撃よりも、何故か数倍攻撃性を増すその視線に、平次は思わず萎縮する。

その隙を見て、和葉はコナンに、謝罪の言葉を述べた。

「ホンマにゴメンな？平次にはあとでたっぷり言うとかから安心し

「てええよ？」

「あつ、気にしないで。平次兄ちゃんが変なこと言うのはいつものことだから」

「コナン君、平次のことよう分かつとるね」

和葉と会話をしながら、「ざまーみる」といった顔で平次に視線を送っていたという事実は、当事者と平次しか知らない。

「こんなところで話するのもあれだから、とりあえずあがつて？」

そんな蘭のナイスフォローもあり、二人は毛利探偵事務所に足を踏み入れた。

「ホンマ久しぶりやね！最後に会ったんは冬休みやったつけ？」

「そうだね。短いようで長いよね、2ヶ月つて。でも、元気そうでよかった」

そんな日常話を乙女が繰り広げている場面に、無粋にも付け入る一人の男がいた。

「元気どころやないで、姉ちゃん。うるそーてホンマ困つとるんや」

冗談ではなく、本気で呆れたような目で和葉を見つめる。

勿論そんなことを言われ、和葉が黙っているはずもなかった。

「なんやて！？平次、今なんて言った！？」

「何べんも言うつたるわ、おまえが毎日ギャーギャーうるそーて大変やってな」

「それはこっちの台詞や！！！！！！」

ここで大阪名物、夫婦漫才ならぬ、幼馴染漫才が始まる。

暫くの間、ご堪能ください……と言いたところだが、二人が来るたびに十分に満喫している関東人三人にとってはおなかいっぱいの光景である。

「まあまあ、せっかく東京に来たんだし、今日くらいは」

すかさず蘭がフォローに回るも、二人の耳には届いていない。  
拳句の果てに、

「ああもうええわ!!オレはこの坊主連れて楽しゅう明日の推理の行方について語りあつとくわ!!」

「っておい、はっ…平次兄ちゃん!？」

と、コナンを右脇に抱え、誘拐していった。

「勝手にしい!」

去り行く平次の姿を見て、そう吐き捨てるも、すでに平次の姿は玄関外へと消えていた。

「工藤、電話で言うったこと、ホンマなんか？」

探偵事務所から離れた路地裏で、声を潜め、コナンに問いかけた。  
そう、実は先程の喧嘩は一種の作戦だった。

こうして平次は自然に、蘭や和葉たちと別行動を取る口実を作った  
……と、本人は思っている。

「何回も説明しただろ？全部事実だよ」

「……やっぱりオレがあんとき……」

「バー口。こうなったのはオレのミスだ。お前には関係ねーよ、服部」

そう言い、自嘲気味に笑う。

その表情からは、安心、そして新たに生じる不安が入り混じったという言葉が汲み取れた。

珍しく空気を読み、次の言葉を選んでいった様子の平次に、  
そっと呟くコナン。

「ところで、彼女は大丈夫なのか？」

静寂を切り裂くかのように出てきた台詞に、突拍子無さを感じ、思わず疑問詞を浮かべた。

「和葉？和葉がどないしたんや？」

相変わらず鈍感な奴だと、人のことが言えないツツコミを心中でしつつ、平次の疑問に答えた。

「お前いつもあんな感じだろ、彼女に対して」

「何言う思ったら……工藤と姉ちゃんやないんやから、ラブラブせえ言うのが変な話やる？」

第一オレはアイツのこと、子分と思うて……ってちょ、待て、工藤！」

ツツコミ無効と判断し、身を翻して反対方向へと足を進めるコナン。追いかけてくる平次を尻目に、そつと独りごちる。

「和葉ちゃんも大変だよな……あの鈍感さ、蘭よりタチ悪い」

一方和葉は、平次に対して怒り心頭といった様子だ。

二人は、気分転換と買い物の為、デパートへと向かっていた。

「もう、なんなん！あの態度……！」

「でも、そんな服部君が好きなんですよ？」

思わぬ清涼剤を浴びせかけられる。冷えすぎて、凍傷を起こしそうな勢いだ。

「らっ、蘭ちゃん、いきなり何いうてんの……！べっ、べつに平次のこと、すっ、好きとか、そっ、そんなんや……！」

軽くパニックを起こし、10人中11人が正解に辿り着ける態度をとる。

勿論、和葉の顔はすぐに沸点に達し、赤くなっていた。

「和葉ちゃん、顔赤いよ？好きだって言ってるようなもんだよ？」

「……ううっ……蘭ちゃんいけず言わんという……って、蘭ちゃんは

どうなん？蘭ちゃんほっぱり出して事件にかまけとつても工藤君のこと……………って蘭ちゃん？」

工藤、と名前が出た瞬間、うつむき加減になる蘭の様子に気づき、言葉を詰まらせる和葉。

「…………ゴメンな、蘭ちゃん…………」

それ以上、言葉を続けることができなかった。  
悪いことをしたと、反省を重ねる中、蘭は顔をあげて、和葉を見つめた。

「うつん、謝らなくてもいいよ、和葉ちゃん。実はね、私」

『きゃ……………っ！！！！ひったくり、ひったくりよ……………  
……………！！！！』

悲痛な叫びが、周囲の日常を非現実へと変えていく。

「蘭ちゃん！」

「うつん、和葉ちゃん！」

それは、少女から、犯罪を憎むストリートファイターへと変貌を遂げた瞬間だった。

頭よりも早く、身体が先に反応する。

疾風の如く駆け抜けていこうとする少女の前に、更なる竜巻が走る。

「平次!？」

「コナン君!？」

少女の呼びかけに気づくことなく、二人は一点だけを見つめていた。犯人という名の、一つのホシを。

「なんやあのひったくり!!足速すぎるやろ!？」

「くそつ、こんな人が多いとキック力増強シューズを使おうにも…

…!」

全身黒に身を包み、深く目差し帽をかぶったそのホシは、体力自慢の二人の探偵を嘲笑うかのように走り去る。

どんどん人通りの少ない裏路地へと入るも、一向に距離は近づかない。

「なんなんやあの犯人…!ホンマただのひったくりなんか?」

「服部、今は追いかけることに集中しようぜ」

「それもそうや、なっ!」

更なるスピードアップを図るも、距離は縮まるどころか、開く一方だった。

そして……

「はぁ……はぁ……見失っちゃったみたいだな………」

行き着いた先は、左右に分かれた道。そこに犯人の姿は見えない。だが、そこで諦めるような二人ではない。

「二手に分かれるんや！怪盗KIDやあるまいし簡単に消えるわけないやろ」

「なら服部は左、オレは右を探す！任せたぜ？」

「ああ、言われんでもな。しくじるんやないで？」

「こっちの台詞だ、バー口」

悪態をつき合い、フツ、と不敵な笑みを漏らす二人。

即座に身を翻すと、脇目も振らず、ただひたすら、犯人の姿を探した。

「平次もコナン君もどこ行ったんやろ…？それにひつたりも…」

和葉は一人、二人の姿を探していた。

偶然の一致というべきだろうか、蘭と和葉も、二手に分かれて搜索を行っていた。

「もう30分ぐらい経つんやけど……ってあれ……」

視界に、見慣れた姿が映る。ただしそれは、色黒の思い人ではなく

「コナン君！」



見慣れた姿に、安堵の表情を浮かべる。  
だが、それはすぐに崩れ去る。

「コナン君……！！ダメや、そっち行ったら」

無常にも、和葉の悲痛な叫びは届かない。  
そう判断するよりも早く、和葉の身体は動いていた。

「コナン君、コナン君……！！」  
「和葉ねえちゃ　　！？」

そこでようやく気づく。

だが、気づいたときには全てが遅い。

キキーーーーッ！！！！！！！！

壮大な音は、常に人々を非日常に巻き込む。

これがその音だとするならば……非日常へのファンファーレとい  
べき音なのかもしれない。

「和葉あ——————！！！！！！」

神の悪戯か。

最悪のタイミングで、その瞬間を目撃してしまう。

「和葉、和葉あ——！しっかりせえ——目え開けろ——！！」

「へい……じ……？」

「そうや、オレはここや。だから……」

「ゴメンな……」

「なんで謝るんや！？もう喋らんでええから、安心して」

「コナン……君……守り……きれんかつ……」

鮮血が、平次の腕を染め上げていく。

「和……葉……？なあ、和葉……」

そこに、いつもうるさく、そしてにぎやかな和葉の姿はなかった。

「（ゴメンな……コナン君、蘭ちゃん……平次……ゴメンな）」

薄れゆく意識の中、和葉は何度も何度も謝っていた。  
ただ、ひたすらに。

その後、平次の連絡により、二人は救急車に運ばれた。  
後に駆けつけた蘭は、無我夢中でその名前を叫んでいた。

「和葉ちゃん！！……新一っ！！！！」

## 1・すべてのはじまり（後書き）

ここまで読んでくださってありがとうございます。

と、言う訳で、ようやく次の話から本題に入ります。

この1話も、まだプロローグ段階です。次も、序章ぐらいで、本格的に話に入っていけるのは3話ぐらいだと思います。そこから完全にギャグに移行できればいいな……と思っております。

えっ？なんで和葉とコナン？と思われる方がいらっしやるかもしれませんが、それは完全に私の趣味です。冗談です。いや、あながち冗談ではないかもしれません……普段原作で接点の無いキャラが話したら、という妄想もとい想像をするのが大好きなのです。

とは言うものの、あくまでもコンビ的な意味での絡みが好きなので、カップリング自体の軸は原作基準です。キャラも、キャラ崩壊が起きない程度に、原作基準でやっていきたいと思っております。

ちなみにタイトルのストループ現象 ですが、ストループ現象とは、普段と違うことをすると混乱する、という現象のことを言います。この詳しい意味は多分すぐ次の話かその次ぐらいに分かるかと。

は特に意味はありません。そのまま題名つけるより、なんかつけた方がカッコよくね？みたいなノリです。お　ヤ魔女ど　み　くらの勢いです。強いて言うなら、リメイク版という意味を強めた、という感じでしょうか。

お気に召されれば、次話でもよろしく願います。

## 2・日常崩壊のお知らせ

「脈拍触知不能、中心静脈圧は5センチメートル水柱、JCS20です」

「すぐにルート確保、輸血、補液準備！！すぐオペを開始する」

冷静ながらも、焦燥の感じられる声が、手術室に木霊する。  
まさに戦場だった。緊迫した雰囲気、彼らの状態を如実に表していた。

\*\*\*\*\*

「……………っ！あのアホっ……………！！」

口ではそう言い放つが、平次の顔には、二人を守れなかったという

自責の念が現れていた。

平次が駆けつけてきたときには、最早避けられない状況下だった。常人以上の身体能力を持つ平次であっても、所詮人間。スーパーマンでもなければ、漫画やドラマでもないのだ。

『ゴメンな……コナン……君……守り……きれんかつ………』

和葉の声が、壊れたオルゴールのように、何度も何度も再生される。いつもは何故か安心を感じるその声は、確実に平次の自意識を蝕んでいく。

「（なんでお前は、いつも自分より他人の心配ばかりするんや……）」

脳内に浮かんでは積み重なっていく和葉との記憶。特に鮮明に浮かぶのは、美國島での出来事。

事件の捜査中、誤って崖から転落しそうになったあの時。

二つの命を支えるには、あまりにも頼りないその枝を見た和葉は、自らの持つ矢で平次の手の甲を刺し、平次を助けようとしていた。あの時は、平次が根性で支え、なんとか二人とも命拾いしたが。

「（……あんときの和葉の目は本気やった……自分よりもオレに生きて欲しいゆう……なんでそこまでしたんや？ 子分が親分助けるゆうても、あそこまで………？）」

そこまで思い返し、あることに気がつく。

今まですんなり受け入れていた、“子分”という表現に、大きな違

和感を感じたのだ。

思い返せば思い返すほど、その違和感は強くなっていく。

「（……子分……なんやろうか……）」

「……っ……とりくん……服部君？」

三回目の呼びかけで、ようやく自分を呼ぶ声に気付く。

「姉ちゃん……どないしたんや…？」

「さつきから思いつめた表情してたから…大丈夫かな、と思って」

そう言い、蘭は弱々しく微笑んだ。

そんな蘭の表情を見て、自分の行いに気付き、謝罪した。

「すまんやつたな……姉ちゃん、あいつのこと心配やろっに」

すると、蘭は否定も肯定もせず、平次に語った。

「服部君、自分のせいで、って思ってるでしょ？」

「……」

何も答えられないことが、肯定のサインだった。

そのサインを受け取り、蘭は静かに語る。

「私もね、自分のせいで、って思うところあるんだ……」

「でも姉ちゃんは何も……」

「そう、何もなくても考えちゃうんだ。もしあるとき、二人を引き止めていれば、とか」

「そんな姉ちゃんには関係ないやろ？結果論や。そんなん思っても」

「でしょ？そんなこと思っても過ぎたものは戻せない。  
だから、起きてしまった過去を後悔するより、今は二人を信じようと思うの」

先程よりも少しだけ、強さのある表情で平次を見つめた。  
蘭自身今でも、自責の念と得体の知れない不安を抱えている。

だが、二人を信じる為、必死にそれらの思いと戦っていた。信じる為、確証の無い言葉を口にした。  
そんな蘭の思いを汲み取り、自分に言い聞かせるように言った。

「……そうやな。姉ちゃん、アイツ戻ってきたらしばき倒したれ。  
心配かけるな、アホってな」

「……うん、そうだね」

二人が何とか平静を保ち、祈るように手術室を見つめ、待ち続けていると、遠くから足音が聞こえてきた。  
手術室を見るが動きがないことから、誰が来たのかはすぐ予想がついた。

「お父さん！」

「蘭！あのボウズと和葉ちゃんの容態は！？」

急いで駆けつけてきたのだろう。シーツはシワだらけ、ズボンに至ってはベルトが無かった。  
いつものような気だるい様子はなく、真剣に二人の心配をしていることが見て取れる。

「それが…手術室に入ったまま。まだ詳しい説明は……」  
「……そうか」



娘の表情から全てを察すると、近くにあるソファ―に座り、二人に語りかけるように口を開いた。

「蘭、あのボウズはこんなところで死ぬような奴じゃねえよ」

「お父さん……」

「和葉ちゃんもな。いつものお守り持ってたんだろ？」

「ああ、そうやけど……」

いつものお守り。

それは、手錠の鎖をお守り袋の中に入れ、平次と和葉がそれぞれ持っているものだった。

実際、何度も二人の命を救い、周囲もその効果の強さを感じていた。和葉はそのお守りを、片時も離すことなく、大切にしていた。それは、今日とて例外ではない。

「なら信じる。あいつらの為にもな」

信じるのはお守りか、それとも和葉自身だったのか。

その真意は小五郎の口からは語られなかった。だが。

「……そうやな」

平次は、小五郎に対し、静かに同意の返事を漏らした。

\*\*\*\*\*

多くの機材が二人の周りを囲む。逆に言えば、これだけの機材により、辛うじて命が繋がっているとあった状況だ。

慌しい状況下でも、二人は活動を停止し、眠り続けたままだった。生命を維持する呼吸活動さえも停止し、気管挿管が行われている。

無機質な機械音が、二人のバイタルサインを告げる。

「血圧低下、体温が上昇しています！」

「出血性ショックなのに体温上昇……外傷から感染を起こしている可能性が高い、抗生物質の準備！」

数字自体は単調に二人の状態を告げるものの、そこから語られる事実は、医療スタッフを焦燥させるには十分だった。

容易に予想できる事態ではあったが、二人の外傷の状態と、現在の状況との兼ね合いに少々判断に悩む。

だが、救命は一分一秒が命取りとなる。悩む時間はなかった。

「二人とも自家静脈を用いた血行再建術を行う。動脈の損傷は酷いが、感染の可能性がある以上人工血管は適応できない」

最悪の選択肢だった。

どちらにしろ、二人にかかる負担は大きい手術だ。術後の経過の問題もある。

だが、最悪の状況下で、最悪の事態を避ける可能性が高いのは、この決断しかなかった。

それぞれの身体から静脈を取り出し、吻合した後、それぞれの身体へと移植を行った。

\*\*\*\*\*

ドアの開く音がする。

一同が斉に振り向くと、そこには医師の姿があった。

「先生！二人は！？」

蘭はその姿を確認すると、真っ先に駆け寄り、二人の置かれている状況を訊ねた。

こんな状況下は慣れているのだろう、一呼吸つくと、逆に三人に訊ねた。

「あの二人のご家族の方ですか？」

「江戸川コナンはうちで預かっている居候です。コナンの両親は海外出張で日本にはいません」

「連絡は取れますか？」

「いや、連絡先は……知り合いの親戚みたいなので、知り合いに頼めば連絡はとれるとは思いますが」

「そうですか……」

小五郎の説明に一瞬訝しげな表情を浮かべるも、すぐに表情を戻し、確認を続ける。

「で、遠山和葉さんのご両親は？大阪から遊びに来て事故に遭ったと聞いていますが」

「……和葉の両親やったら大丈夫や。オレがさっき電話しとったからすぐ来ると思うで」

「分かりました」

「そんなことより和葉とあのボウズはどないなったんや！！ちゃんと無事なんやろうな！？」

「ちよつと、服部君！」

今にも掴み掛かりそうな勢いの平次を必死に止め、なんとか落ち着かせると、蘭は再び訊ねた。

「二人の容態は……」

「一時は危険な状態でしたが、今は安定しています」

「よかった……」

と、安堵の様子を浮かべたのも束の間、医師は、ですが…という接続詞を紡ぐ。

「動脈の損傷が酷く、外傷性感染の可能性が考えられた為、自家静脈による血行再建術を行いました」

「……自家静脈？血行再建術？」

疑問詞を浮かべる小五郎に対し、医師よりも早く平次が解説を行う。

「自分の身体の静脈使こつて、損傷した動脈の替わりにするんや。本来やったら人工血管ゆもん使うんやろうけど、外傷のときは避けたほうがええんや。感染するとかばい菌が人工血管に住み着いて、抗生物質大量に投与しても殺しきれへんからな。そうやる？」

「えっ、ええ……」

どうみても高校生にしか見えない目の前にいる少年が、医学知識をペラペラと語りだす様子は、異常そのものだった。

何度も緊急事態に接し、ある意味では非日常に慣れている医師とは言えど、医療以外での非日常さには驚きを隠せなかった。

だが、驚いてばかりもいられず、平次の説明に補足を加える。

「手術内容はだいたい彼が説明した通りです。ですが、この術式にも欠点があります。動脈は本来、心臓から血液を送り出す為に必要な、強い圧力に耐える為、弾力があり、厚みがあります。ですが、静脈は動脈に比べ壁が薄いといった構造の違いがあります。その構造の違いによって、血栓、血の塊ができやすくなり、それが詰まって致命傷になる可能性があります」

致命傷という言葉が、彼らの頭に重くのしかかる。

そんな様子を察知したのか、医師はすかさずフォローを入れる。

「勿論全力は尽くします。手術自体は成功しましたし、術後の様子は安定しています。自発呼吸もみられましたし、二人の意識もじき戻るでしょう」

まだ完全に安心したという気持ちにはなれなかったが、取り合えずは一安心といったところだ。

再び彼らの様子を確認すると、挨拶をし、医師は去っていった。

その後、看護師が現れ、三人の思いを傾聴した後、事務的な手続きやその話に移った。

\*\*\*\*\*

一日後、術後合併症は見られず、バイタルも安定してきた為、集中治療室から、ナースステーションに近い二人部屋へと移動となった。だが、依然として意識だけは未だに戻っていない。

和葉の母親はすぐに東京に駆けつけ、和葉と再会した後、手術同意書や入院に関する事務的な手続きを済ませ、入院準備を行っていた。本来ならば、付きっ切りで看病したいところだったが、集中治療室は、肉親であっても、長期の面会は禁止されていた為、泣く泣く病院を後にした。

父親・銀次郎も、愛娘の命の危機とあって、すぐにでも駆けつけたところだったが、緊急に仕事が入り、どうしても抜けることのできないものだった為、妻に愛娘の全てを任せたといった状況下だった。

コナンの方は、事務的な手続きは阿笠が行い、入院準備は蘭が行っていた。

和葉の母親と同じく、長時間の面会は禁止されていた為、一旦家へと帰り、入院準備を行っている。

平次は、さすがに毛利探偵事務所に泊まるわけにもいかず、阿笠の家へ泊まることとなった。

それぞれに、部屋の移動に関する連絡が入ったのは、昼過ぎのことだった。

部屋の移動自体は早朝だったが、色々と慌しかったようで、連絡が

遅れたとのことだった。  
そして、朗報が入る。

「二人とも意識が戻りました。状態は昨日から安定しています」

その言葉に、全ての思考が停止し、そして歓喜に震えた。

\*\*\*\*\*

「あなた、ちゃんと5R確認したの！？ダブルチェックは！？」

ナースステーションでは、主任看護師が、新人看護師に対し、怒気を滲ませた声で問いただしていた。

そんな主任の威圧にも負けじと、自らの行った事実を冷静に語った。

「二つとも行いました。カーデックスにも確認のサインをしています。ダブルチェックを行った看護師のサインも入っています」

そういうと、新人看護師は、二人のカーデックスを取り出し、主任に差し出した。

そのカーデックスは、彼女の言い分の正しさを示していた。

「あなたの言うことは本当のようね……でも、そうなるとうしてかしら？投薬前の確認も行ったのよね？」

「行いました。きちんと5R、正しい薬剤、正しい時間、正しい投

与量、正しいルートそして、正しい患者、全て確認しました」

新人看護師の言葉を受け止め、判断したのち、指示を行った。

「二人の状態をしつかり観察して。あとあなたは、すぐにアクションレポートを作成して。現時点で分かる範囲でいいから」  
「分かりました」

指示を受けた看護師は、それぞれの仕事を行っていった。  
自身も仕事を行いつつ、一つの疑問が、何度も脳内で響く。

「（どうして名前も性別も、投与量も違う点滴が……）」

解明できるはずがなかった。

このとき起きていた事態は、現在知られている医学では、到底考えつくことのない異常事態だったのだ。

看護師が認識していた自体はその一部に過ぎなかった。

\*\*\*\*\*



目の前にいる存在を、形容する言葉など思いつくはずもない。  
どうして？という疑問詞さえ無意味に感じた。  
ただ、そこにある全てが理解できなかった。

どうして見慣れた姿が、目の前にあるのだろうか？

## 2・日常崩壊のお知らせ（後書き）

ここまで読んでくださってありがとうございます。

ようやく本題の序章に入れました。焦らしたような終わり方ですが、もうなんとなく分かりますかね……？

本当はもっと早く掲載する予定だったんですが、何故かカオスアニメにはまってしまう、脳内がカオス&ギャグワールドになってしまい、今回のシリアルな話を書けず…今日に至ります。

教訓：シリアスを書くときはギャグを見るな

なんか途中医療ドラマみたいな展開がありましたが、私は医療ドラマをあまり見ないので、かなり怪しいことに……一応調べたりしましたが、何せんウィキ先生との睨めっこによる代物な為、やはり怪しい出来となっております。

こういうときは便利な言葉がありますね。

この物語はフィクションです。実在の人物・団体・国家とは一切関係ありません。

……今回の話を書いてて、つくづく医療ものとシリアスパートは似合わないことが分かりました。

コナン、入院手続きはいいとして、保険証は？というツツコミは無しの方で。金持ちなんで、全額負担しても大丈夫なんですよ、きつと。

……原作で大怪我（25巻）してたときも普通に入院してましたし。

それでは今回はこのへんで。次回は本題に入ります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3234p/>

---

ストループ現象

2010年12月14日19時37分発行